

史学科だより（令和三〔二〇二一〕年度）

教員構成

令和三年度の専任教員は、教授Ⅱ寺沢知子・村田路人・川森博司・松下孝昭・山内晋次・吉村真美の各先生、准教授Ⅱ梶木良夫・鈴木宏節の各先生という構成であった。史学科主任は松下教授、大学院日本史学専攻主任は村田教授が担当した。

このうち、永年にわたって考古学分野を担当されてきた寺沢先生が、令和三年度末をもって定年退職された。寺沢先生は博物館学芸員養成課程も兼任され、ゼミの卒業生や大学院修士の中には学芸員や文化財技師として活躍している人が少なくない。これまでのご功績に対し、この欄をお借りして衷心より感謝の意を表すると同時に、今後とも学科の発展を見守っていただくようお願い申し上げます次第である。なお、次年度からはその後任として、齋藤穂生先生を准教授としてお迎えすることが内定した。次に、非常勤講師としては、大学院の授業に永松圭子先生に出講していただいた。学部授業には、秋

山浩三・磯部淳史・伊藤一馬・上山益己・尾崎真理・金子直樹・木村典子・島津毅・高野陽子・竹原千佳・塚本浩司・サラ・デュルト・豊福一・中阪守・西本幸嗣・浜田直也・菱田淳子・深井明比古・福田和浩・毛利英介の各先生に出講していただいた。

史学会の活動

コロナ禍が二年目に入ったものの、過剰なまでの「自粛」の「強要」はいっこうに衰えることなく、さまざまな活動に甚だしい制約を受けた。例年一月に開催していた史学会総会は二年続けて開けなくなり、それにあわせた記念講演会も開催できていない。そうした中でも、『神女大史学』は第三十八号の編集が順調に進められ、論文一本、研究ノート一本、書評一本を掲載して刊行することができた。

史学科の活動

コロナ禍は史学科の学業や研究にも大きな影響を与えた。新年度のオリエンテーションや入学式は実施できなかったものの、授業開始後の三週目からは全面

的にオンラインに切り替えられた。六月下旬になつて原則として対面形式に戻ることとなつたが、後期授業も当初三週間ほどはオンラインで開始されるなど、学生も教員も翻弄され続けた。

そうした影響で、入門演習の一環として予定していた学外実習とその報告会は中止を余儀なくされた。夏季休暇中の史学科の恒例行事であつた研修旅行も、二年続けて実施できなくなつた。退職される寺沢教授の最終講義も開催を見合わせた。

こうした混乱の中でも学生らは真摯に学業に取り組む、学外での教育実習や博物館実習も滞りなく終えることができたのは幸いであつた。大学祭がオンライン化されたことで、博物館実習生による拓本展示も実施できなかった。しかし、展示内容を解説する動画を作成して記録に残し、それらの活動を総括した『すみあくと』第二四号を刊行することができたのは、制約のある中での大きな成果であつた。